

弥生日和～弥生の日常風景～

【終業式・離任式が行われました】

3月24日(火)

本日は終業式と離任式がありました。



校長先生から、三つのお話がありました。

まず一点目は、伊那新校の校名案についてです。

先日開催された伊那新校再編実施計画懇話会において、「長野県伊那高等学校」を最終校名候補とする方向で意見がまとまりました。その理由として、伊那北高校が旧制伊那中学校、弥生が旧制伊那高等女学校という歴史的なルーツを持ち、名称として伊那が共通していること、また校名によって学校の性格を定義し過ぎず、生徒たちが自由な発想で新しい歴史や校風を積み上げていってほしいという願いが込められていることが挙げられました。

今後は、県教育委員会定例会で審議され、最終的には令和9年11月の県議会で決定する予定です。なお、校舎の建設については、伊那北高校の旧校舎の一部解体と仮設

校舎の建設、新校舎建設が進んでおり、音や教室移動などの影響が出ているようです。

また、その懇話会の構成員として本校から参加していた2年生の生徒会長さん(松崎さん)と副会長さん(毛利さん)の二人について、うれしいお話がありました。弥生の代表である二人が、

考えうるさまざまな観点から堂々と意見を述べてくれたということです。現在の私たちが感覚的に思ったことを言うことは簡単かもしれませんが。



しかし、未来の後輩たちが通う学校の名前としてよりふさわしいものは何かを考え、それぞれ説得力ある理由をもとに発言し、地域の方々を納得させていたとのことでした。皆さんも、考えて表現すること、そしてプレゼンテーションすることを、日頃から意識してほしいと思います。



次に二点目は、定期考査の回数についてのお話でした。定期考査の回数が一回減りました。このことは、生徒の皆さんに時間を返すという意味がありますが、裏を返せば、自分で時間を見つけ、必要なことを自主的に行うことが求められているということでもあります。こうした習慣を通じて、本校の校是でもある「自主自律」の気持ちと実行力が身に付いていきます。やらされたことに使う時間ではなく、自分で

選択した時間の使い方に責任を持てるようにしてください。

三点目は、作家の五木寛之さんのお話でした。五木さんが先日テレビ番組の対談に出演し、先月発表した『大河の一滴 最終章』の内容について語っていた中で、校長先生が印象に残った言葉を紹介してくださいました。

「私にとって、生きるということは、生きることができなかつた者たちのために生きる、という感覚が根のところにあったような気がする。」

また、日々を豊かに生きることについての問いに対して、

「人間は知的好奇心の産物であり、『なぜ』という問いは死ぬまで消えない。大きな人生の目的だけでなく、『あの漫画が終わるまでは生きていたい』というような目標でもよいのではないか」という言葉も紹介されました。

そして今年度は、十二名の職員が異動となります。出逢いがあれば別れがあります。異なる視点や考えに触れられる関係の中でこそ人は成長し新しい気づきを得るのだと思います。先生方のこれからのさらなるご活躍を祈念いたします。

